

梯久美子著『この父ありて 娘たちの歳月』の書評を見て、読んでみたいと思っていたところ、息子の妻が「面白いから、読んでみて」と貸してくれた。著名な9人の女性作家たちと父との関係を立体的に描き出している。尊敬する父もいれば、苦難を背負わされた厄介な父もいる。しかし、その父が娘に決定的な感化を与え、作家として大成させている。私は、父と娘の関係だけでなく、興味深かった三点について書いてみたい。

茨木のり子は、医師・宮崎洪の長女である。戦後30年経った1975年に、昭和天皇が記者会見で、戦争責任について問われ、初めて語った。それを、茨木は下記のような詩で著している。「戦争責任を問われて / その人は言った / そういう言葉のアヤについて / 文学方面はあまり研究していないので / お答えできかねます。」詩は下記のように続いている。「思わず笑いが込みあげて / どす黒い笑い吐血のように / 嘔きあげては 止り また嘔きあげる / 三歳の童子だって笑い出すだろう / 文学研究果たさねば あばばばとも言えないとしたら。」この詩について、茨木は後に下記のように書いている。「もし、仮に私が戦争未亡人で遺骨さえ手にしておらぬ身であったとしたら、この記者会見をテレビでみて、天皇に対してどんな激烈なことでもやってのけられそうな気がした。少女時代にはよくわからなかった戦争未亡人の思いというものが、ひしひしとわかる年代に私も達した。」戦争未亡人でなくても、天皇の発言にはゲンナリして、茨木の激烈な詩に頷くだろう。医師であった父・宮崎から、出来事を直視し、真摯に関わることを学んだのではないか。

辺見じゅんは、角川書店創業者で俳人の角川源義の長女である。角川文庫の巻末には、源義の「発刊に際して」の言葉が、現在も下記のように書かれている。「第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗北であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し、痛感した。」二等兵として召集され、馬の当番をしていた源義は下記の歌を詠んでいる。「雨いつか雪となりあるくらがり、病馬をまもり、たちてみにけり」辺見は父の歌を、次のように解釈している。「病馬とは文化を失った国家の謂（いい）だとわたしは理解している。病馬は倒れ、廢墟と化した日本の大地に文化の苗を植えつきたいという思いを抱いて父は帰還した。そして、出版社を始めたのだと思う。」文化の脆弱さが敗北をもたらしたという視点は確かなのではないか。日本は文化を、軍隊を支える道具に取り込んでしまった。武力を振りかざす戦争に対し、戦争を阻止するほどの強力な文化力を持ちたいものだ。辺見の『収容所（ラーゲリ）から来た遺書』には、歌を詠んで希望をつないだ話に、文化には真の力があることを訴えている。

石牟礼道子は、石工・白石亀太郎の長女である。亀太郎は、学歴はなかったが、人間の生き様を豊かな感受性で受け止める人であった。道子は近くの妓楼の娘さんたちとよく遊んでもらっていた。町内の女房たちは妓楼の娘を蔑んでいたが、父は「あの娘たちは親思いの感心なおなごたちぞ。悪う言うては気の毒じゃ」と言っていた。ある時、妓楼の娘の一人が、近くの少年に刺されて殺された。解剖に連れて行かれ、立ち合い人が必要であったが、妓楼の主人も消防団長も拒んだ。関係のない亀太郎が娘を憐れに思い、立ち合った。彼の弱者に対する優しさを伝えるエピソードを幾つも記している。大酒飲みで、若い頃に他の女性に産ませた子どもが、訪ねて来た驚きもあるが、道子は、父の優しさを受け継ぎ、水俣病者と深く、固い結びつきを生んでいったことに間違いはない。それにしても、9人の彼女たちは皆、輝いている。文化が「美」を作り上げていくのであろうか。（敬称略）